

「2018 年 サローネ国際家具見本市」概要

「2018 年のプロジェクトの方向性はどのようなものなのか」という疑問への一定の明確な答えを見つけ出そうと期待して「2018 年 ミラノサローネ国際家具見本市」(以下、ミラノサローネ)に来られる皆さんには驚きの結果となるでしょう。一本の方向性というものがあるわけではなく、多様な方向性があるのが今年のミラノサローネです。それぞれ相異なる多くの方向性があるのですが、根本的にはそれぞれが異なるものではなく、つまり危険を承知で言えば、「定義された傾向の欠如」という最近の傾向(言葉遊びをしているようですが)が考慮されなければならない、ということです。反対意見が出ることも予測しているとはいえ、ここ 10 年あまりの傾向としてはこのような認識がより一層主張されつつあるということを我々はここで述べたいと思います。新たな「イズム」という新語を作ろうとの試みが最近よく見られますが、実際には「新たなイズム」は起こりませんでした。つまり 2018 年は、「オーガニズム;有機体論」から「古典への回帰」まで、さらに「純粋の探求」から「ファンタジーの探求」まで、多くの様々な美意識の追求があり、そしてそれぞれの風潮の中には文化的・地理的に多種多様のバックグラウンドを持つさまざまな国籍のデザイナーが身を置いています。これは世界中あちこちでクリエイターが1カ所にとどまることなくグローバル市場の中で移動し続けているということ、そしてそこでは「ローカリズム」が、少なくとも創造性という視点からは失われつつあるように見えるということの表れでもあります。この結果、それぞれの「国のスタイル」という定義が意味を失いつつあります。たとえば、イタリアン・デザインがドイツのデザインよりもむしろ北欧デザインに対置されるのが当然のことになってきているのです。今日では、ギリシャ企業の製品を北欧のスタイルに思いを馳せてデザインするドイツ人デザイナーに遭遇することがありえないことはありません(例えば **Catherina Lorenz I Steffen Kaz** が **Anesis** のためにデザインした **Halla** チェア) 同時に「エスニック」という言葉はデザイン界では廃れてきています。もはや、香辛料を配合するようにアフリカとアジアを、ラップランドとペルーを混同していたマルコポーロという言葉のように遠い昔の夢物語となっています。(Gervasoni からは **Paola Navone** がマホガニーから切り出した肘掛け椅子 **Carve** を提案しています)

この「多形成 Polimorfism」という傾向は(「含有 inclusion」と「文化的交差 cultural crossing」という単語ももてはやされていますが)、21 世紀初頭からずっと成長を続けているようです。繰り返しますが、今後先も、従来と同じように、機能主義、グッド・デザイン、ポストモダン、ミニマリズムといったような統一的で存続的な動向が新たに見られるかどうかは明確ではありません。この単一の方向性の欠如ということを強調する一方で、しかし、現在の多様な傾向に共通する要素もあるということは指摘することができます。まず、「ものの物語的価値」の回復、ものが雰囲気を作り出し、収集家の宝箱のような「奇跡の部屋」としての空間にものが共存することへの回帰ということです。いわゆる「白いキューブ」への言及はもはや稀なことで、「部屋」によって取って代わられました(「部屋」のコンセプトは、「ロフト」のコンセプトをもはや大きく凌駕しています!)。現代の部屋はピンクから赤のトーンと、グレーからペトリウムカラーまでのトーンのさまざまな色彩で溢れかえっています。家具、照明器具、オブジェ、これらは必ずこうしたムードにあったものが採用され、「精巧な木材」、「貴重な加工」、「身体を包み込んでくれるような布地」などと一緒に使われて部屋のイメージを「暖かい」ものにしていきます。この場合特に大事なはそのものだけの持つ独特の「手触り」です。2018 年のインテリア家具は目で、また手でも、愛でてもらいたいと思っています。ニュートラルなものというものはなくなり、我々のアイデアや情熱を表現する力を持つ、「語る偶像」というものが増えています。

また「オーガニズム」というセンシュアルな傾向が回復してきたということが特にはっきりとしてきました。例えば **Artek** が継続する、**Alvar e Aino Aalto** の細心の配慮を込めたリプロダクトがあります。(ガラス製品の名品 Savoy を簡素化した陶器 **Riihitie Road** など) また、**Costance Guisset** が **Bosa** のためにデザインした カラーの花の形をした官能的な **Fusca** は、従来の純潔な白色を捨てて、蘭の花の様々な色彩を纏った新製品となりました。また、ソファなどの形態も従来の決まった形からより有機的なものに移行しつつあります。**Jean-Marie Massaud** (現在この分野で最も取り上げられるデザイナーの一人) が **Poliform** のためにデザインした **Sydney** ソファのように先の尖った巨石的だったり、

Offecct Lab のために Emmanuel Babled がデザインした Babled Chair のように石の上の貝殻の形を導入したり。

また、より重厚な古典的作品をモデルにリニューアルした製品でも、手で撫でた時に心地よさをもたらす、一体化した曲線状のものに向かう傾向にあります。例えば Paolo Rizzatto が Alias のためにデザインした New Lady チェア・コレクション。高い職人技と工業生産を結びつける試みを惜しみません。こうした態度は「エルメス症候群」と呼ぶことのできる、疑問の余地なく明らかな最近の傾向の一部をなしています。フランスの老舗皮革メゾン、素材の品質の高さと加工技術の特徴である類を見ない手仕事文化について語る時に、適切に、また場合によっては不適切にも、引用される例に事欠きません。仕立て屋的な細やかな仕上げの、皮革、大理石、真鍮、金属を使用した製品は数多く (Jean-Marie Massaud が Poltrona Frau のためにデザインした Byron チェアなど)、今までに使われなかった素材を採用した製品より多くみられます (例えば伝統技術を利用した滑道式の木製ブラインドや宮本晋作が Ritzwell 社のためにデザインした、少し厚みをつけた皮を表面に加工した食器棚 Jabara)

古典への回帰は否定できない傾向で、本物の「古典的製品」について語るようになるのは間もなくのことでしょう。ますます広く共有されているトレンドは疑いなく「リメイク」です。過去の名品が今また求められ研究され、賞賛され再提案されており、たいいていの場合、製品のもつ歴史への配慮を持ちしつつ行われています (もちろん、明らかに無責任なスタイルの改ざんという例にも事欠きませんが)。一般の人は (ビニール盤のレコードを聴いたり、ポラロイドで写真を撮ったり、スターウォーズに感動したりすることに回帰しています)、定番化した製品の価値を理解し、歴史の持つ重みを評価するようになってきています。ノスタルジックであるというわかりやすい見た目、またエレガントなデザインの価値を認めているという以上に、買う側にとっては流行り廃りのない、時を経ても変わらない投資、という保証を意味します。この分野でもブラジルからイタリアまで、様々な地理的コンテキストで広範囲に研究が行われていることが確認されています (Pino Manzù デザインのテーブルが Alias 社で生産されるようになったことなど)。しかし、今の主流のデザインは北欧のものだということは疑いのない

ころです。Fritz Hansen, Carl Hansen & Son、Erik Jørgensen などの企業などは、Carl Hansen & Son によって再提案された 1952 年の Arne Jacobsen の Society Table など我々が「アイコン」と呼ぶところのシンプルな製品の再提案を行っています。スウェーデンの Sven Markelius によって 1930 年にデザインされた Markelius 01 テーブルの無駄を省いたエレガンス、1970 年に Erik Jørgensen がリプロダクトした EJ270 ソファなどもこの例です。これら作品の美しさは広く共感を得ているだけでなく、近年の風潮であるリアルサイズの住環境(大きなことはいいことだのこれまでのビッグサイズ信奉を否定する)に置くのに適したサイズである点もこれらの名品の再評価につながっているのです。このサイズ再考を進める有能なデザイナーも存在します。例えば特筆すべきは Christophe Pillet のキルティング加工製品がより家庭サイズに向かっていること(Cappellini 社のための High Time コレクション)、アウトドア製品(Ethimo 社の Grand Life シリーズ)、ソファ(Tacchini 社の Memory Lane ソファ)など。よりコンパクトな製品へ、というこの傾向、これは現在主流となった「コージー」という美意識とももちろん相反するものではなく、居心地のいい空間を楽しむけれど決して「オーバー」にはなくということなのです。この「サイズダウン」化というアプローチは、これまでになかった「女性化」という興味深い傾向をもたらしています。女性デザイナーの強みが活かされるわけで、この点もミラノサローネ 2018 ではご覧になっていただけるでしょう。女性デザイナーは人数の上でも製品数でいっても増えており、例えば、木材ブロックの強化加工に強みを持つ Mattiazzi 社は Inga Sempé の繊細な皮肉のこもった MC17 ソファを提案しています。女性スタイリストの仕事の内容が変化してきている、という一般的な傾向もみられます、これはデザイナーの役割にももちろん言えることである。特に Elisa Ossino、Arianna Lelli Mami、Chiara Di Pinto のユニット Studio Pepe を挙げることもできるでしょう。最近頭角を現しているイタリア人デザイナーでも女性が圧倒的に優勢となっています(Cristina Celestino、Francesca Lanzavecchia、Elena Salmistraro、Alessandra Baldereschi、Maddalena Casadei、Giorgia Zanellato、Chiara Andreatti など)。

「再編集」という意味では、むしろ「引用」という言葉を使ったほうが適切かもしれませんが、これは経緯をたどって復刻させることはできない品々ですが、その家具そのものと醸し出す雰囲気インスピレーションを受けて作られたような製品に当てはまります。例えば最初のオリジナル製造でも成功し、リプロダクトも何度も繰り返されてその度に爆発的に売れた **Chiavari** チェア、**Ferruccio Laviani** による **F.lli. Boffi** 社の戦前の製品である食器棚 **Muriel** の復刻などです。また、屏風、コンソール、衣装用ワゴン(ジャケット掛け)など過去のスタイルへの復活もこのノスタルジーを求める風潮に関連したもので、衣装用ワゴン(ジャケット掛け)、これは主に紳士用の製品ですが、衣類を念入りに手入れするという最近の傾向とマッチして再度生産されるようになってきたものです (**Analogia Project** による **Frag** 社の **Valet**)。最後に特記すべきは「鏡の凱旋」です。つまり従来は存在しなかったナルシスト世代を満足させる製品です。なかでも素晴らしいものは宝石のような **Giorgio Bonaguro** の **Tacchini edizioni** 社の **Soleil**、**Lanzavecchia-Wai** の手がけた **Fiam** 社の **Pinch** など、また同様に美しい芸術作品のような **Inga Sempé** の **Magis** 社 **Vitrail**、これは商品名(ステンドグラス)が示すようにミラー加工された板に細かいネットと着色したガラスを組み込んだもの、また、**Marco Brunori** の手がける **Adele-C** 社の **Pablo** など。また中国の占星術を再解釈したような洗練された商品、**Piero Zuffi** の **Missoni Home** 社の **cineserie**、他に住まいを彩る要素として、クッション、今のインテリア界を牽制している壁紙(ウォールペーパー)などもあります。こうしたリバイバルの風潮は名著「Filosofia dell'Arredamento」(内装の哲学)の著者 **Mario Praz** ですら想像できなかったでしょう！

上記は、無邪気にロマンチックなノスタルジックを求める傾向の持つ多くの面のほんの一部です。同様の傾向のもう一つの面としてテレビドラマシリーズ「ゲーム・オブ・スローンズ」に出てくるような室内装飾を用いた 18 世紀後半の「ゴシック小説的表現」というトレンドもあります。(ただしこの傾向はトルキンの小説を題材とした映画「ロード・オブ・ザ・リングス」ブームで始まったというのがより正しいのですが)。例えば「反美的審美観」(ポスト・インダストリアル的な、もしくはプレ・インダストリアル的というのがいいか)は凋落傾向にあります。**Marc Sadler** による **da a.**社のいたるところに鉤を打ち込んだ総合金仕上げの **Rock** チェアが

好例、「ファンタジー」は疑いなく今日最も際立ったトレンドの一つなのです。デザインにおいて実証されるこの傾向はもちろん、ファッション、映画、また、とりわけ陶磁器界でも平行して起こっており、奇怪であったり王室の調度のように豪華だったり、また奇妙だったり暗示的であったりするような製品が多くみられるのです。これに関しては今年最も注目されているデザイナーの一人である **Jaime Hayon**、老舗ブランド **Bitossi** のポエティックなキュービズム的な洗練された形の **Natalie du Pasquier** の作品に言及しないわけにはいかないでしょう。布地についても同様の傾向が見られ、アフリカのバティックや、熱帯の鳥類やドラゴンなどのモチーフの 17 世紀の版画などが現代風にアレンジされ復活しています。それらが、絹、ラフィア、レーヨンなど、素材に関係なく、ふんだんにフリンジを付けたりといった誇張した形で再登場しています。また筋模様が入った大理石、アンティーク加工の木材、アンティーク調のタイルなどの床にもふんだんにカーペットが欠かせません。若いトルコ人女性デザイナー **Begüm cânâ Ozgür** による 色彩の微妙なニュアンスがこれ以上なく美しく洗練されたカーペット、**nanimarquina** 社の **Shade**、**Hella Jongerius** 考案のアンティークのフェルトの再解釈による **Kvadrat** 社の **Sienna** コレクションなど。

こうしてみると、居心地よくコージーな部屋というのは、まるで博物館のようになりそうです。しかし「有名作品の並んだ博物館」というのではなく、トルコ人作家 **オルハン・パムク** **Orhan Pamuk** が採用した原則でいうところの「デイリーライフの博物館」であり「我々の記憶の博物館」です。新しい形の家具・オブジェのコレクションというのは、近年の蚤の市で見つけられるようなものたちです。ノスタルジーとキッチュの間にあるような家具とオブジェです。「キッチュ」とは最近の現象について語るのに便利なもう一つの言葉で、もはや否定的なニュアンスからは解き放され（1968 年に **Gillo Dorfles** が既に考えていたように、また **Alessandro Michele** が **Gucci** において起こした革命を経た今日ではさらに）、**studio Job** による **Seletti.it** のための **Hot Dog** ソファ（ハンバーガーとキュウリのスライスもセットになった）や、キラキラした、というよりギラギラした、金色の家具などキッチュの例には枚挙にいとまがありません。「金 **Oro**」（金製のものだけでなく、金メッキ、真鍮なども入れて全部）は、目下インテリアの分野で大変よく聞かれる用語として復活しつつあります。止まることを知らな

い経済危機を払拭するための魔よけとしてでしょうか？ そして金への「対抗馬」として現れたのが Pantone 社が発表した今年の色「ウルトラバイオレット」で、この色を魔よけの為に使いたいと思うバイヤーはまずいないでしょう(注:イタリアでは宗教的背景から紫は不吉な色とされている)。

主流のトレンド分析に戻ると、ここまで説明したあらゆる「語りたという衝動」に共通する極めてポジティブな面として、失われつつある手仕事・職人技の再発見があります。今日の製作アプローチは極めて質の高い細部処理・最終加工を要します。例えば希少な大理石 (Rodolfo Dordoni の Minotti 社 Morgan Marple テーブルの青銅と一緒に使われたカラ Катタ・オーロ Calacatta Oro)、Cristina Celestino が Gebruder Thonet Vienna 社の花の形のテーブル Carillon に採用した麦わらの絨毯(もしくは麦わらの寄木加工)、Massimo Castagna デザインによる Henge 社の Ace テーブルの木の根のモザイクなど。Marco Zito による Saba Italia 社の美しい屏風 Shade of Venice の材質として船舶用の綱が採用されたように、加工技術の匠の技のおかげでこうした卑近な素材も見直しが進んできているのです。

もちろん、これまで主流を占めてきたトレンド全般においてそうであったように、このファンタジーのあるいはキッチュの強烈な「語りの衝動」も拒絶反応をもたらすのは確かです。つまりこれに対峙する「究極のミニマリズム」という提案も少なくありません。イタリアの文学的比喩でいう「言語的沈黙」という流れです。日本人デザイナー岩崎一郎はオフィスのラウンジ空間を抽象化された枠組みのように形作られたデスクと無駄を省いた応接コーナーに配置するイメージを提案 (Arper 社の kiik)、またノルウェーの Daniel Ribbakken は Artek 社のために 124 度の角度で反射される「天使」の形を描くツヤ出し加工したステンレスの床をデザイン (商品名も 124 gradi)。これら製品の「沈黙」は家具の饒舌さとも調和するので。ヴェネツィアの高潮のような表面が錆び加工された Zanellato/Bortotto による De Castelli 社の Marea の収納箱、1967 年のジオ・ポンティの名品”Triposto”を引用した Gordon Guillaumier による Lema 社の Faroe などは、新しい商品のタイプとしてクッショ



ンと収納箱からなる応接スペースを作り出しています。最後に、究極の抽象のシンボルとして、日本・台湾のデュオ **Tamaki** の描く表意文字のような、しかし実際にはコートハンガーなのですが、用途はまったく二次的なものであるというような **Living** 社の製品を象徴的なものとして紹介しておきたいと思います。

2018年4月17日ミラノ

Salone del Mobile.Milano Japan Press PR

Yuki Yamamoto - yuki@milanosalone.com - www.milanosalone.com